

無機の涙

静岡県立沼津東高校 P N 桃宮守

高層ビルが立ち並ぶ、喧騒な街の市街地。その一角のアパートの玄関から、タケシは外へ出た。廊下の床を踏んだ途端に、モーター音が響き出す。ガコン、という音と共に、タケシを乗せた廊下が動き出した。そのまま廊下はエレベーターへとタケシを運び、タケシはエレベーターに乗り込んだ。ときは近未来。至る所で機械化が進み、あらゆることが自動化されている。エレベーターはタケシの顔を判別し、一階へと勝手に運んでくれた。その最中にも、天井のカメラとセンサーが体調をチェックし、異常があればすぐさま知らせてくれる。

アパートを出ると、空に無数の飛行物体が緩やかに飛んでいるのが見える。飛行物体、すなわちドローンは、現代社会を支える大切な要素だ。今やほとんどのオンライン上で買い物が、このドローンで済まされている。

「便利な世の中になったもんだなあ」

タケシは一人ごちた。その少し上空ではドローンに加えて、最近開発された空中走行用の自家用車が飛行している。そのせいで、ありとあらゆる方向から駆動音が聞こえ、無数の影が道路に落ちる……というのは一昔前。現代では自動で光度を調整する街灯に加え、音を吸収する「逆スピーカー」なるもののおかげで、そんなことも無くなっている。

実を言うとタケシは、この状況を好ましく思っていなかった。自然と生きて、自然と助け合ってきたのが人類ではなかったのだろうか。ふと空を見上げた時に目に入るのは、ドローンではなく渡り鳥がいい。ふと耳を澄ませた時に聞こえてくるのは、電子音ではなく木々のざわめきがいい。タケシはため息をついた。

数分歩いた後、タケシは目的地に辿り着いた。公園である。ベンチに腰掛け、タケシは辺りを見渡す。青々とした芝生。立ち並ぶ樹木。無機質な景色に包まれた街中で、唯一自然の趣を感じれるのがこの公園だ。……と言いたいところだが、実はそんなこともない。一面に広がっている芝生は、良く見ると全て人工芝。真っ直ぐに天へと伸びている樹木の葉は、揃いも揃って直方体状にカットされており、まるで情緒は感じられない。これを美しい景色と呼ぶことに、タケシは抵抗があった。整備されていなくても、草いされの匂いと、その中を這い回る昆虫たちさえいればそれで十分なのに。タケシは空を仰ぐ。公園にすれば少しは気分がマシになるかと思ったが、どうやらそんなこともない。タケシはオレンジ色に染まりかけた空に気づき、大した時間も経っていなかったが、もと来た道に戻り始めた。

やけに真っ直ぐに整備された、まるでかつての古都のような道路をすすむ。等間隔に

並んだ街灯には、少しずつ灯りがともり始めていた。どの街灯を見ても、光に群がる虫は一匹もいない。政府の害虫移動政策のせいだ。緑地が減って虫が都会に生息しなくなったため、蟬の一声さえ耳に入らない。タケシは静まりかえった道路を、自分の足音を囁み締めながら進んだ。

時間はすでに夕刻。道路に落としていた視点を上げると、自分のアパートが目に入る。いつのまにか家に着いていた。タケシがエントランスに入ると、エレベーターのうちの一つが自動的に開いた。そのままエレベーターに乗り込むと、タケシの降りたい階のボタンがひとりでに点灯する。最近ボタンを押す必要もないらしい。タケシは苦笑いして、上昇するエレベーターに身をまかせた。

エレベーターを降り、自分の部屋へ向かう。向かうと言っても、ベルトコンベアに運ばれて、だが。タケシはドアの目の前に立つ。そしてドアノブに手をかけ、後ろを振り返り向いた。振り返った瞬間、ソーラーパネルに反射した眩い光が目に入る。タケシは憂いを覚える。四方から光なんて差し込む必要はない。ただ一つ、オレンジに光る夕陽が地平線を照らしてくれるだけでいいのに……。それでもきつと、この世界はこれから機械化を進める。それが、利便性を求め続ける世界の結論なのかもしれない。タケシは小さく首を振りながら、玄関を開けて中に入った。

「おかえり。勝手に休んどいて」
ご主人様だ。

「はい」

タケシは返事をして、壁際に歩み寄った。そして、買ってきた機械執事用充電器を、自分の背中のコンセントに差し込んだ。